

# 本多静六通信

第5号

発行  
本多静六博士  
を記念する会

## 県民待望の「彩の国

### ふれあいの森」がオープン

埼玉県農林部林務課

課長 小池 迪 男

本県の最西北部に位置する秩父郡大滝村の奥地、一般に「奥秩父」と呼ばれる中津川地域は、ブナ、シオジ、カエデ、モミなどからなる原生林や山あいをぬう溪谷など、四季おりおりに美しさを変える自然に恵まれ、豊かな緑と清らかな水を生みだし、今、私たち県民の心の「源流郷」として、貴重な県民共有の財産を育んでい



彩の国ふれあいの森  
埼玉県秩父郡大滝村大字中津川447番地



森林科学館(左)と大滝村宿泊施設(コテージ)



館内にある本多博士の胸像(中央)



大滝村宿泊施設「源流郷こまどり荘」

ます。ここには、現在、約三千ヘクタールの県有林があり、昭和の初期から地元の中津川地域と一体となって、自然に配慮した森林の保全整備を進めてきています。

この中津川県有林の大部分を占める二千六百七十六ヘクタールは、日本の林学界の基礎を築いた菖蒲町出身の本多静六博士外から、秩父地域の振興と奨学金制度の実施を条件に、県に寄付していただき、県は、その収益を特別会計により、育英基金に積み立て、その運用収益を奨学金として、大学生等に対し貸付けを行うなど、

有効に利用してきています。

「彩の国ふれあいの森」は、この中津川県有林を都市と山村の交流の拠点として整備を進め、県民をはじめ首都圏の方々に、自然観察や健康増進などの自然とのふれあいの場として利用していただき、併せて、地域の振興と活性化を図るため、平成元年度から事業を始め、約二十七億円の事業費を投じて、平成五年度で完成し、平成六年六月一日に、開園の運びとなったものです。

ふれあいの森の広さは、約三千ヘクタールで、森は、原生、学習、くらし、野鳥、体験、鉱山、生産の森の七つのゾーンに分け、自然観察路、散策歩道、炭焼き窯、野鳥観察小屋、植物園などを設置しています。

拠点施設の森林科学館は、木造二階建て、延べ床面積九百九十九平方メートルの建物で、展示施設、木工工作室、学習室などが整備されています。展示は、ふれあいの森の概要を地形模型やイラストマップで紹介したプロローグではじまり、森林の働きや森の生き物たちの情報をジオラマやオブジェ、映像などの展示手法を駆使し、さまざまな角度から森林、林業、木材などについて学ぶことができます。さらに、「秩父ゆかりの人物」として、本多静六博士のほか平賀源内の業績を紹介するコーナーも設置しています。

なお、館内にある本多博士の胸像は、菖蒲町から寄贈されたものです。

# 本多静六先生追想記(一)

## —直弟子から見た偉人像—



東京大学名誉教授 農学博士 嶺 一三

本稿は、平成五年十一月二十五日、本多博士の母校三箇小学校において、本多博士の胸像除幕式並びに開校百二十周年式典が行われた際、嶺先生より特別寄稿されたものを再編集したものです。  
当会では、嶺先生のご了解をいただき、改めて本通信に掲載するものです。

### 自序

本多静六先生は、埼玉県が生んだ偉大な人物の中の一人である。

私は本多先生が東京帝国大学教授を、停年制で退職された昭和二年に、東大を卒業した先生の最後の講義を聞いた弟子である。

更に先生が会長をして居られた帝国森林会に、昭和二年から五年まで週二回助手としてご指導を受け、その縁故で樺太の調査(昭和四年)に随行し、昭和八年の樺太拓殖調査委員会にも随行して先生を補佐する大役を任せられた。

先生に直接教えられた貴重な体験を持つ生き残りの直弟子として、ご生誕地の各位が企画さ

れた顕彰事業等に感謝して、私が先生から賜った数々の、教訓と思いい出を書きたいと思う。

先生が晩年著述された「本多静六体験八十五年」(講談社刊、昭和二十七年二月十五日発行)となつているが、先生はその直前一月二十九日に伊東市のご自宅で、急逝されているから正に絶筆である)で、少年時代、苦学時代、大学時代、本多家へ婿入りの話、ドイツ留学、教授時代、海外旅行、家庭生活、人と事業、処世の秘訣、健康長寿法等、先生の一生の主要な事件と体験を、簡潔に要領よく記述して居られる。

更に昭和三十二年十二月十六日発行の武田正三氏著「本多静六伝」(埼玉県立文化会館刊)は、上の本多先生著書の内容を忠実に紹介した上で、本多家その他から提供された資料を併せて、編著書目録(三七六冊)、年譜、家系図、人生計画総括表等を加えてある。

武田正三氏は、本多先生の女婿の三浦伊八郎先生の甥で、本多先生のご生前に薫陶を受けた方で、その記述は二・三の思い違いはあるが、信用のおけるものと保証する。

この二冊の著書の記述と重複をさけて(時には若干の補足をして)追想記を書きたいと思う。

### 一 講義・実習・指導旅行

本多先生の大学における講義は、他の教授と一風変わった方式であった。

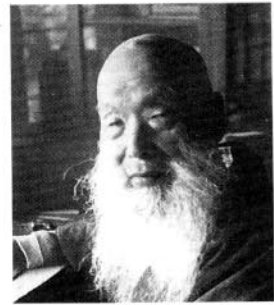
造林学の講義では、本多造林学を初め数十冊の先生の著書を、次の週の講義予定分を予習するよう指定され、それを要約してノートに書いてくることを指示された。これをドイツでは Protokoll (プロトコール)と呼んでいる。この際に先生の本だけでなく、関係のある他の本も勉強していただくことは、奨励された。

次の講義の際に、指名された学生はプロトコールを要領よく、面白おかしく(先生の言葉そのまま)興味を持たせるように説明できるように練習をする。質問や自分の意見があれば発言するようにと教えられた。

この説明を聞いた他の学生は、自分の分と比較して切磋琢磨する材料とするようにとも言われた。

それが終わると、先生の講義が始まる。先生は学生や聴衆に興味深く聞かせるいろいろな勉強工夫がされていた。雄弁で有名な学者・政治家の講演を聞いたり、人気の高い講義(講釈)を聞くため寄席通いもして、その成果を講義や講演で実演されていた。

ところが、先生の著書が膨大であるので、毎回数十頁が通例で、時には一冊を一回ですます



本多静六博士

金のない学生には教室所蔵の本を無料で貸す制度を設けて居られた。

私はこの方式に共鳴して、先生の本だけでなく他の学者の本（外国も含む）を読んで、時には先生の本に書いてあることを批判すると言う生意気な態度もあつたことを反省している。

演習林の実習は、先生が発案されて日本最初の大学演習林となった千葉県清澄山で行われた。巨体の先生は腰にまかれた長い帯の両端を二人の女人夫に引かせ、測量ポールを杖代りとして、坂道はもとより平地でも悠然と闊歩された。要所に来ると、歩を止めて音吐朗々と得意の講義（講釈調）を披瀝された。教室における講義よりも活気があつて面白かつた。

昼休みには、当番の班が前日の実習のプロトコールを読む定まりであつた。先生の講義と学生のプロトコール（私共の級が書いたものも含まれる）を、助手の中村得太郎氏が編集をして造林実習日誌として公刊されている。

私は後年、東大や東京農大教授になつた時、講義には本多方式をそのまま採ることはできなかったが、野外実習では専門の森林経理や測樹

こともあり、学生にとつて勉強も大変であつたが、本の購入費もかなりの金額であつた。しかし、先生は

以外の林学全般を、本多先生のように話す努力をした。ただし私は先生のように二人引きではなく、七十歳停年の農大時代でも、単身で学生の先頭にたつて、急坂を登つて健脚を誇つた。東大では、二年生の夏休み前に教官に引率されて、一週間か十日間有名林業地を視察する行事（学生は大旅行と呼んでいた）があつた。私共は幸運にも本多先生の指導で、青森県と秋田県を視察した。十和田湖・奥入瀬の国立公園で、国立公園設定の苦心談や天然美観賞の秘訣を教えられ、埼玉県出身で、学生時代に先生の薫陶を受けられた県知事さんのご厚意で秘境といわれた下北半島の佛が浦を船で案内されたり、内真部のヒバ天然林を見学して解散した。私はそれから数人の友と北海道と樺太の東大演習林を訪れた後、卒業論文の資料の測定に清澄演習林へ向かつた。

（次回は、「二 帝国森林会の助手時代」を掲載します）

著者紹介

明治三十七年十月一日生まれ。福岡県出身。旧制五高を経て、東京大学農学部林学科を昭和二年に卒業。東京大学講師、助教授、教授を歴任。昭和四十年三月定年退職。名誉教授の称号を受ける。その間、帝室林野局出仕、国立林業試験場経営部長等を兼務。東大退職後、東京農科大学教授に就任。昭和五十年三月定年退職。農学博士。

博士が手掛けた各地の公園(三)

釧路・春採公園(一)

太平洋を見下ろす高台にある春採公園は、釧路市を代表する公園として多くの市民に親しまれて。そもそも本公園は明治二十年頃、当時の郡長宮本千方樹氏により提唱されたものであるが、当時としては極めて画期的な発想であつた。

つまり当時の日本人にとつて、公園というものは馴染みがないばかりか、相当な費用を必要としたからである。それでも公園を必要とした背景には、国際的な港町としての発展を目指す釧路は、「よい港町はよい公園をもつ」という欧米の例にあるように、その姿勢を貫くことであつたようである。

その後この公園構想は歴代の町長に受け継がれたが容易に実現しえなかつた。そしてついに大正五年、本多博士の設計により、公園化の構想が具体化したのである。



市立博物館のそばにある春採台から春採湖を望む湖には天然記念物の緋鮎が生息している

時の町長、林田氏により招かれた本多博士は、同年八月九日、最終列車で釧路入りし、翌日から精力的な現地調査を行い、公園設計に着手した。そして設計案ができると、市内の公会堂で新しい公園についての講話を行い、併せて新聞等を通じ市民にその内容を公表したのである。（以下次号に続く）

## 日比谷公園新設当時の思い出

林学博士ドクトル 本多 静六

本稿は去る六月一日夜日比谷公園公会堂における日比谷公園開園三十周年記念講演会で講演されたものである。

東京大学農学部所蔵・東京市公報（昭和七年六月九日）より

日比谷公園新設当時の思い出と題して、大分古い遠い昔の思い出話を申し上げます。

而してここに過ぎ越し来た後を顧みますれば、今から実に三十三年前、即ち明治三十三年の木ノ葉の黄ばむ秋の頃、自分は東京府の多摩川水源林調査嘱託として東京市議に出入する内、偶々辰野金吾博士の室に遊びに行きました。

その時、同氏が日比谷公園の設計図を書いておられたので、話の序でに私が些か意見を述べた所、「君はそんなに公園の事を知っているのか、自分は建築の事なら兎も角公園の方は全く初めてだ。実は東京市で日比谷の練兵場跡に公園を造る事になって数年来、庭師や茶の宗匠等に設計して貰ったが、何れも市会を通らない。そして市会の希望は日本に初めての「新設公園」から、大体新式な西洋風の公園を造れと云う事で、その設計を頼まれて困り切っているところだから」とて、無理やりに地形図を僕に押し付けられた。

そこで止むを得ず、農科大学に持ち帰って二

週間ばかりかかり下図を作って持参した所、辰野君は大賛成で、早速松田市長に話されたので市長から改めて私が嘱託せらるる事になったのであります。

所が実は自分も初めてなので、僅かに西洋の公園を見て来て公園に関する本を数冊持つて居るだけだから甚だ心細かったが、兎に角日本に専門家がないとすると、これから努力する人が勝つのだ、自分から求めた訳でなく先方から押し付けられたのは即ち天命だ。出来るだけやって見ようと決心してやり初め、今日存する公園の車道即ち大道路に自分がフリーハンドで勝手に書き上げて、公園敷地四万九千坪をその大道路で大体四つに区画し、其一区画即ち今の庭球場や児童遊園・動物園・草地等のある一区画だけは日本風庭園となす事とし、その分は当時最も良く日本庭園の事を調べて居られた小澤圭次郎君に頼み、他を自分でやる事にして、日比谷見付付近のお濠は石垣とその上の木を生かして、稍心字池をくづした形の池となし、鶴の噴水のある雲形池はドイツのペルトラムの公園学中の模範をその儘に借用し、他の遊歩道や運動場等もドイツ公園の形をそれぞれ応用してやる事にし、公園に使う大きな石と今でも曲がって居た黒松とは主に取り壊された各見付の残り物

を用い、今日の躑躅園の部分には当時売物に出た、大久保の躑躅園を全部五百円かで買って上げて移植する事にした。

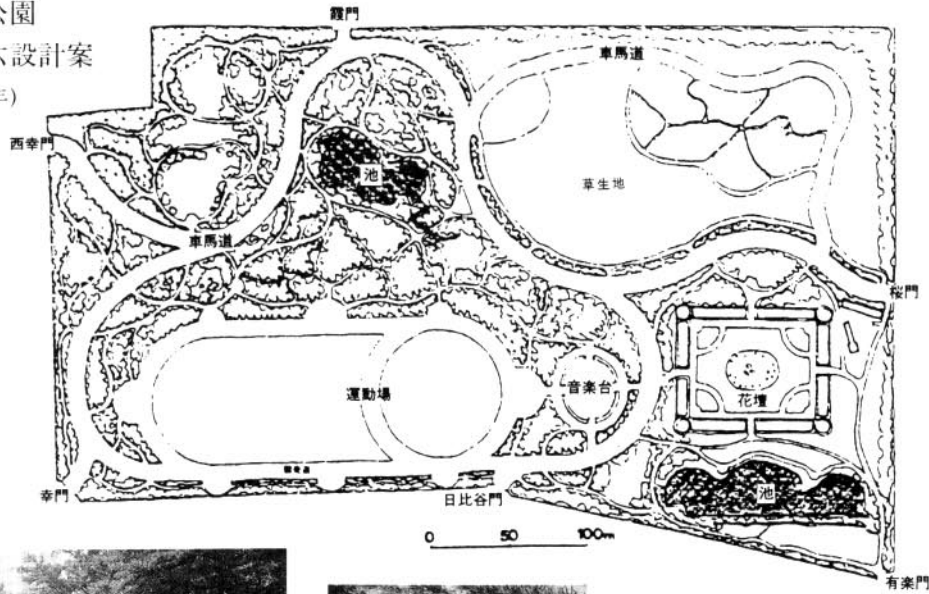
而して本公園事業に主として尽力されたのは、当時の助役吉田弘蔵君と市参事会員であった中鉢美明君とでありました。尤もこの設計については内外から随分非難もあつた。

その一二をお話し致しますと、何故に門の扉を設けないのか、西洋ではよかるうが、日本では夜間に花や木を盗まれてしまうと大分攻撃された。その時に私は答えました。「公園の花きを盗まれない位に国民の公德心が進まなければ、日本は亡国だ。公園は一面その公德心を養う教育機関の一つになるのだ。それに家に居た時は親の隠して置いた菓子まで取って食う子供が、菓子屋の小僧になると二三日で菓子に飽いて一向食わなくなると同じく、私は公園に沢山の花きを植えて国民が花に飽いて盗む気の起こらない位にするのだ」と答弁した事を記憶する。

次に公園に池を造るのは身投の名所になる因だと非難された。それには私も多少心配したが、土堤の上から一と思いに飛び込めないように、石垣の直ぐ下には地面を突き出して置き、且つ池の周囲には浅瀬を造ることにしました。投身にはコツコツ歩いて沈みに行く様な悠長な事では駄目で、ドブンとひと思いに飛び込まなければ景気が悪いと見えて一向身投の名所にはなりませんでした。

兎に角私の設計に対して顔々と起こる如上の

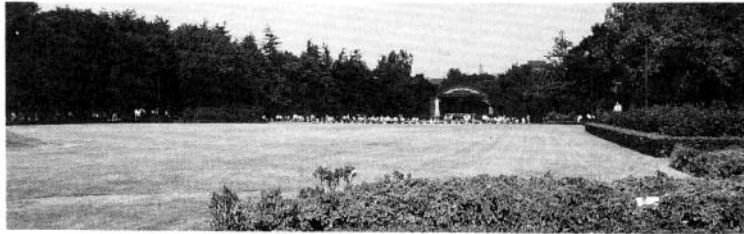
日比谷公園  
本多静六設計案  
(明治34年)



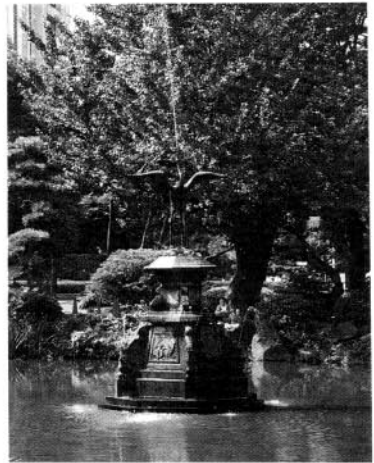
△園内にあるイチョウ並木



△開園当時の水飲



△第二花壇



△雲形池にある鶴の噴水

非難攻撃を防ぐ必要があったので、先ず衛生上の意見や常識判断を聞く為に石黒軍医総監を、花壇の相談相手に、福羽逸人君と松村任人君とを、その他土木や建築や市政に関する数人の委員を市より囑託して貰い自分の原案を先ずそれらの人々に評議して貰ったうえ市会に提出しました。

所が小澤君の日本庭の分は否決されたが、他の三部は幸に全部通過して明治三十四年に着手したのであります。予算はたしか二十八万円だったのを十七万五千円に減額され、その代り樹木等は極く極く小さな苗木で十年後に庭になればよいからという事で、その多くは幸い自分が管理していた農科大学苗圃の不用苗木を只同様で払い下げて植え付けたのであります。現に図書館その他周囲にある樺のごときは、僅か一二尺の小苗木であったが、今は目通り周り三尺八寸余、高さ六七間の大木になりました。

大木で思い出すのは松本楼傍の大銀杏の事だ。この大銀杏は今の電車通りの日比谷十字路から二十間ばかり桜田本郷町の真中にある邪魔になるからとて、金四十円で薪屋に払下げられ、薪屋は上の方から切り下げていた所を私が通るかかって、「おい君切るのには暫く待ってくれ、僕が市役所に行って買戻す事にするから」として、ひとまず止めて置いて市役所に駆け付けた。

丁度松田市長の前の時の市会議長であった星亨君が何か話して居た所に、私が急用だとして大

銀杏の命を助けて新公園に移す事を申し述べた所が、星君が先ず口を出して、「それが移せば結構なことだが、実は市に出入の植木屋に見せた所、そんな化けそうな大銀杏はとも移せませんというから、仕方なしに薪屋に売ったのだが、君にそれが移せるのか」と、あの剛腹な態度でいわれたから、その時は未だ若くって負けず嫌いであつた僕は少し癪にさわって、「植木屋に移せる位なら僕が出るに及びません。植木屋の出来ないものを移すのが我々専門家の役です」というと、「それなら君に請け合えるのか」と問われたので、「地球大の印紙を張って保証します」というと、「そんな空の事では駄目だ」というから「そんなら私の首をかけましよう」ときっぱり答えますと、星君はたちまち

笑顔を作つて「それほど君に自信があるならやつて貰う。金は幾ばかりでも出すから」といわれて、日数二十五日、費用四百六十円をかけた今の所に移して、今日諸君が見られるごとき、日比谷公園の重鎮となつたのであるが、当時目通り周囲二十尺、長さは上から切られたから六間の棒状で、根張の直径二丈九尺、根の深さは僅かに五尺、目方は二万貫でありました。

兎に角生き物である樹木を植え代えるのに、私が自分の首を賭ける等とは無鉄砲の至りだ、首のかけ代へでもあつたのかと、お笑いになるかもしれませんが、実は私はその前に青山の某華族から「手水鉢台になつている銀杏が化けたから見てくれ」とのことで行つて見ますと、約

五尺周り、高さ四尺ばかりのズンド切りの銀杏を逆さに埋めて水手鉢の台にしたのが、芽を出して茂り始めたのであつた。

そこで私は研究のために、大小幾多の銀杏の枝や幹を挿木して試みて見た、ところが新芽の出る前に挿して水さえ適当にやれば、一本残らず活着する事を実験していったから、根が無くてさえ着く銀杏をいくら大木でも老木でも、根があつて着かない訳はないという考えで、請け負つた次第であります、実際私の首が今日までつながつているのは、この大銀杏が活着してくれたお陰だと、その前を通る毎に幹を叩いて昔を偲ぶのであります。それ以後、私の教室では本多の首かけ銀杏と呼ぶ様になりました。

要するに今から三十年前の当事、我国には洋風の庭園や公園を設計する専門家は一人もなかつたが、この日比谷公園の新設が動機となり、世間に幾多新公園の要望起り、東京市だけでも既に大小九十二箇所の公園ができ、自分も未熟ながら二百余の公園の新設または改良に当たりましたので、自らそれに趣味を生じ、遂に大正四年から東京帝大林学教室に造園学なる名称の下に庭園公園の講義を始め、その後京大、九大その他にも造園学が設けられ、幾多造園の専門家が排出するようになり、私は今から三十年前の當時を思い比べて、転々今昔の感に堪えず生ろに感慨無量なるものがあります。これ私が特に本日この思い出話を申し上げ敢けて諸君の清聴を煩わしたる所以であります。

## 本多博士と 大分県湯布院町



四季を通じて多くの観光客が訪れる金鱗湖

大分県大分郡にある人口約1万2千人の湯布院町は、九州の軽井沢とも呼ばれ、季節を問わず年間340万人もの観光客が訪れています。

古くから、九州屈指の温泉地として親しまれてきた湯布院町ですが、今ではユニークな「音楽祭」「映画祭」が開かれる町として、また、先進的なまちづくりの面からも全国的に知られるようになりました。

### 「由布院温泉発展策」を論じた本多博士

その湯布院町に本多博士が訪れたのは、大正13年10月のことでした。当時の湯布院町は、隣接する別府温泉と同様、いわゆる歓楽型の温泉地として賑わっていたといえます。

ここで博士は、小学校の講堂において「由布院温泉発展策」と題した講演を行いました。講演の内容は、欧米の現状を説きつつ、歓楽型の温泉地から、保養地型の温泉地への転換を促すもので、施設の整備、名物の発掘、温泉宿の改良など具体的な提言を行いました。

しかし、余りにも斬新な提言は、直ぐには実

東京大学農学部所蔵

### 本多博士関係文献について

このたび本多博士の母校であり、奉職の場でもあった東京大学農学部のご協力を得て、林学科森林風致計画研究室に所蔵されている本多博士の著書を中心とした文献について、資料調査並びに写真撮影を行うことができました。

なお調査に当たっては、東京大学教授・農学博士熊谷洋一先生、同助教教授下村彰男先生のご指導を賜りました。書面をお借りして厚くお礼申し上げます。

#### 博士の著書全体の2割に当たる72冊を所蔵

『本多静六伝』（武田正三著・S32・埼玉県立文化会館発行）中の「本多静六編著書目録」によると、博士は生涯に376冊の著書を残し

「本多静六先生論説及び公園設計集」より	
No	書名
1	Japanese Gardens as Portraying National Characteristics (大正10)
2	今後の文化的庭園(欠年)
3	理想的都市計画(欠年)
4	大地震大火事に対する安全策(欠年)
5	風景の利用と天然記念物に対する余の根本的主張(大正10.10)
6	日比谷公園新設当時ノ思出(昭7.6)
7	森林公園と奥秩父(中津峡)の景勝(欠年)
8	隠れたる木曾の風景と利用策(欠年)
9	広島市の発展策 特に風景の利用(欠年)
10	前橋市敷島公園計画案(昭和4.3)
11	小諸公園(懐古園)設計案(大正15.5)
12	福岡県経営東公園・西公園・大堀公園改良計画(大正14.9)
13	各国の公園、運動場、登山地其の他保健的施設(欠年)
14	第三次台湾巡遊所感(欠年)
15	海外に於ける国立公園及び森林公園の実況(大正12.3)
「本多静六先生公園設計集」より	
16	釧路公園設計案(大正5.8)
17	室蘭公園設計ノ大要(大正5.8)
18	若松公園設計方針(大正6.6)
19	日光一帯の山水風景利用策(大正3.6)
20	埼玉県の泉是と園芸(大正6.6)
21	埼玉県氷川公園改良計画(大正10.5)

ています。現在、森林風致計画研究室には博士の著書をまとめた3冊の合本があります。

『本多静六先生論説及び公園設計集』

：15の著書を合冊

『本多静六先生公園設計集』

：33の著書を合冊

『本多静六先生論説及び公園設計集』

：24の著書を合冊

これらに所収されている著書の多くは、明治末期から昭和初期にかけてのもので、ほとんどが他の図書館等では見ることのできない貴重な資料ばかりです。

#### 貴重な公園関係資料を情報発信源に

今回特に注目されるのは、20余に及ぶ公園関係資料です。記念する会ではこれらの情報を漸次関係各機関へ提供していく中で、博士が日本

を代表する各地の公園にどのようになんか貢献していたかを顕彰していく予定です。なお、表に掲げた資料(著書)について、直接、東京大学にお問合せすることは(ご迷惑となりますので)ご遠慮いただくと共

現に結び付きませんでした。しかしこの時の精神が長い時間受け継がれ、今日の発展を迎えたという方もいます。

#### 「由布院町史」に残る本多博士

湯布院町で旅館「亀の井別荘」を経営する中谷健太郎さんもその一人です。中谷さんは町史編纂事業に携わる中で、偶然、本多博士の講演記録「由布院温泉発展策」を発見し、大変驚かれたそうです。何故ならば、今、自分たちが取り組もうとしているまちづくりの姿が、なんと70年も前に記されていたからです。

当然、本多博士の講演内容は「湯布院町史」にも刻まれることになりました。

中谷さんは、これまで様々な立場から湯布院町のまちづくりに携わり、今日の湯布院のイメージを築き上げてきた一人ともいえます。



由布岳のふもとに広がる湯布院町の街並み

しかし、バブル経済とそれに伴う外部資本の流入は、湯布院町に大きな変化をもたらしました。こうした状況を受け、本多博士の話をしをされる中、中谷さんは「今こそ本多博士の提言に学び、原点に帰るべきだろう」と感想を話されていました。取材に当たりご協力を頂いた中谷様、湯布院町教育委員会の皆様、並びに関係各位に対し書面をお借りして厚くお礼申し上げます。

「本多静六先生論説集」より	
51	天然記念物と老樹名木(大正5.10)
52	記念植樹の手引(一名大木移植法)(大正4.5)
53	記念樹ノ保護手入法(大正5.4)
54	大地震大火事大海嘯に対する安全策と公園(大正12.10)
55	根本的治水策(明治43.10)
56	林相の変化と国産の関係(欠年)
57	市町村有林の価値と森林公園(欠年)
58	森林の民衆化と森林公園(大正13.1)
59	土倉翁造林頌徳記念(大正10.10)
60	林業の進化(欠年)
61	山林と人生(大正14.11)
62	大增訂民林改良法講話(明治37.8)
63	温泉場の経営法(昭和6.4)
64	幸福の真諦(欠年)
65	私の人生観(昭和7.2)
66	直に幸福になる処世の秘訣(昭和4.8)
67	世界文化の大勢と青年の覚悟(欠年)
68	世界経済界の大勢と南米植民の実行案(大正12.3)
69	世界文化急先鋒北米所感(大正13.7)
70	爪哇(ジャワ)及び馬來旅行談(欠年)
71	樺太経営私案(大正6.8)
72	規那樹の性質と栽培法(欠年)
73	林業の進化等に山林の園芸化経済化に就て(欠年)
74	林業談筆記(高知県農会報号外)(明治34.10)

22	文化生活ト川越市ノ都市計画(大正15.2)
23	明治神宮建設ノ位置ニ就テ(大正2.11)
24	(小冊子等広告)(欠年)
25	市街地「特ニ本所区」ノ樹木ト人生(大正5.10)
26	(新潟県北蒲原郡笹岡村)村杉ラジウム温泉風景利用策(大正10.6)
27	福井県武山蘆山公園設計図及び説明書(大正14.12)
28	軽井沢遊園地設計方針(明治44.10)
29	職業の道楽化と日本バーデン(大正10.7)
30	(長野県)須坂町公園設計案(大正15.5)
31	木曾風光調査概要(欠年)
32	名称保存と千本松原(大正15.11)
33	日本菜園風景の利用策(欠年)
34	清洲公園設計案(大正6.12)
35	岡崎公園設計案(大正6.12)
36	(愛知県)中村公園改良策(大正6.11)
37	養老公園改良案(欠年)
38	森林公園と琵琶湖風景利用策(明治45.7)
39	大阪府公園ノ改良方針(大正2.10)
40	森林公園と有馬温泉風景利用策(大正5.11)
41	和歌山公園設計案(大正4.2)
42	大典記念尾道公園の設計(大正4.12)
43	広島県備後国帝釈風景利用策(大正7.9)
44	錦帯橋を中心とする岩国風景利用策(大正3.8)
45	大典記念下関日和山公園設計書(大正3.9)
46	大分県速見郡由布院温泉発展策(大正13.10)
47	熊本市郊外江津湖を中心とする敷地計画殊に其の公園系統に就て(昭和6.2)
48	付、都市研究会会則(昭和6.2)
49	(鹿児島県)霧島公園計画(大正9.9)
50	京都府南山公園設計案(大正6.3)

に、閲覧等については、記念する会事務局へお問合せください。なお資料はプリント製本の他、フィルムは35ミリ・モノクロ、リール対応になっていきます。また、ここに記されている著書以外に、所蔵場所等をご存じの方がいらしゃいましたら、事務局までご連絡いただきますようお願いいたします。

## 編集後記

手さぐり編集の本通信も、第五号の刊行を果すことが出来ました。資料の収集も順調に又、ご依頼の原稿も快くお寄せいただき、一同安堵致しております。

特に東京大学農学部林学科・森林風致計画研究室・熊谷洋一教授には、本多博士の研究資料・全国各地の公園設計や調査報告・講演の収録等貴重な学術資料の提示を賜わり、公開することが出来ますことは本会にとって、至上の光栄と心からお礼申し上げる次第であります。

これで本通信が、学術情報の発信基地として広く活用されるようになりました。

尚本号には、埼玉県農林部林務課の小池勉男課長様の玉稿も戴き、末筆ながらお礼申し上げます。

記念する会では、日増しに全国各地から寄せられる質問やご意見が多くなり、十分な対応が出来兼ねることもありますことをお詫び申し上げます。

年と共にうすれ行く博士の偉業を風化させることなく、通信に乗せて、広く、長く伝えるべく、関係各位のご寄稿をよろしくお願い申し上げます。

【編集発行】 本多静六博士を記念する会  
〒346-01 埼玉県南埼玉郡菫蒲町大字新堀三十八番地 菫蒲町役場企画課内  
電話 ○四八〇(八五)一一一(代表)